平成 23 年・24 年度　文部科学省人権教育研究指定校
研究のまとめ

豊かな表現力をもった児童の育成

～子どもの気持ちや考えを聴き取り、子どもを支えることができる教師～

授業づくり

「学びあい学習」の充実

子どもたちが主体的に自分の意見を発表し合う「学びあい学習」への取組。

授業力向上プロジェクトの推進

子どもたちの確かな学力を保障するため、授業研究のあり方を見直し、教師の授業力向上を目指した取組。

集団づくり

児童理解の工夫

人権チェックポイントや、Q-U テストの活用、教育相談の実施。

自尊感情を高める取組

帰りの会での賞賛やがんばり賞・思いやり賞、集会での発表など、自尊感情を高める取組。

仲間意識の育成

学級で活動するトリム・縦割り班で活動する仲良しサークルなどの実践。

関係づくり

学校だより

学年だより

人権教育だより等を生かした啓発

学年(学級)部会の開催。学年だより、学級だよりの工夫。

人権週間を通した保護者啓発の工夫

人権週間における人権作文や人権だよりを通した連携の実施。

家庭との連携　親同士が話し合い子育てや親のかかわり方について学習する「親学習プログラム」の研修や、課題解決のための研修の実施。

足利市立毛野南小学校

１　研究主題

豊かな表現力をもった児童の育成

～子どもの気持ちや考えを聴き取り、子どもを支えることができる教師～

２　基本的な考え方

学校における人権教育は、教育活動全体を通じ、人権を尊重した差別のない人間関係の育成を目指して、計画的、組織的に推進されるものであり、本市教育委員会でも、「自らをかけがえのない存在と気付き、人権にかかわる問題を乗り越えられる児童生徒の育成」を目指している。

児童が自分の大切さに気づくためには、自分の思いや願いを受けとめてくれる人間関係があってはじめて実感できるものである。そこで研究テーマを「豊かな表現力をもった児童の育成」とし、児童一人一人が大切にされる人間関係の中で、お互いに自分の思いや考えを伝え合える表現力の育成を目指して研究してきた。また、サブテーマを子どもの気持ちや考えを聴き取り、子どもを支えることができる教師と設定し、人権教育を意図的・計画的に実施していくために、本校で設定した「人権チェックポイント」を意識した授業を積み重ねると共に、テーマに迫るため授業の柱に「学びあい」の学習形態を取り入れるなど、子どもと向き合う授業の充実・改善に力を入れて取り組んできた。

1 年目のおわりに実施した児童のアンケートからは、先生や友だちは自分の意見をよく聞いてくれる・授業はわかりやすいと答えた子が 9 割を超えたものの、自分の考えを発表できる・友だちや先生に質問できると答えた子は 6 割程度にとどまっていた。このことから、2 年目も 1 年目の研究テーマを継承しさらに深化させるべく研究に取り組むこととした。また、児童と教師、保護者と教師、児童同士の人間関係づくりを基盤にして教育実践を積み重ねること、教師が児童の実態を絶えず把握することに努めることを人権教育の基底に据え、あらゆる教育活動において、児童一人一人を大切にする教師になるための実践的な研究を推進することが必要であると考えた。人権教育は学校教育の場にだけとどまらず、家庭・地域社会との連携まで視野に入れて取り組むことが重要であるため、家庭・地域との連携した指導支援のあり方についても研究を深めていくことにした。

また、研究の推進にあたっては、研究内容を「授業づくり」「集団づくり」「関係づくり」の３つの柱とし、具体的な実践を通して研究主題に迫ろうと考えた。

3　推進全体構想図

学校教育目標
〇がんばりぬく力
〇思いやる心

人権教育研究課題
豊かな表現力をもった児童の育成
～子どもの気持ちや考えを聴き取り、
子どもを支えることができる教師～

教職員研修・被差別体験者との交流

研　究　内　容		
〇授業づくり 〈自分の思いを自分の言葉で伝え合う力を育てる指導の工夫〉	**〇集団づくり** ＜助け合い・励まし合い・支え合う学級集団づくり＞	**〇関係づくり** ＜保護者と教師で児童を支える関係づくり＞
・「学びあい学習」の充実 ・授業力向上プロジェクトの推進	・児童理解の工夫 ・自尊感情を高める取組 ・仲間意識の育成	・学校だより、学年だより、人権教育だより等を生かした啓発 ・人権週間を通しての保護者啓発の工夫 ・家庭との連携
チェックポイントの活用		

学校間協同推進による実践的研究

個　へ　の　着　眼

人権問題に対する認識の深まり

児童・教師・保護者の実態

4　研究の内容

（1）授業づくり

ア　「学びあい学習」の充実

学校教育における人権教育を推進するためには、学校生活の中で一番子どもと向き合う時間が多い「授業」を充実させることが大切である。そのためには、指導者である教師が、子どもの気持ちや考えを聴き取り、子どもを支えることができるようになることが不可欠である。そのような教師像に迫るため、昨年度までの国語科による授業研究と平行し、子どもたちが主体的に自分の意見を発表し合う「学びあい学習」に取り組んだ。

グループ探究学習

＜学びあい学習の学習過程＞

発問　・・・・・・多様な考えが引き出せる課題

↓

個別探究　・・・・・・理由、自分の言葉で

↓

ペア・グループ探究　・・・・発想を引き出す（認める）

↓

協同（クラス）探究　・・・・関連づけを重視する

↓

個別探究　・・・・・・類題の提示、考え方の評価

できる学力とわかる学力（※１）をバランスよく高めていくための課題づくりや指導計画の見直しが必要であることを再確認し、授業づくりに取り入れた。また、外部指導者を招聘し、協同的な探究学習についての学習会を実施し、授業研究会の質を高める環境づくりにも努めた。

■解説■

※１ できる学力とわかる学力　藤村宣之（東京大学大学院教育学研究科）より

国際比較調査にみる日本の子どもの学力の特質（PISA 2000, 2003, 2006; TIMSS 2003, 2007）

１）国際的にみた学力水準の相対的な高さ（数学的・科学的リテラシー）と関心の低さ

２）日本の子どもが得意な内容→「できる」学力

手続き的知識やスキルの適用，定型的問題解決，選択肢に対する判断

３）日本の子どもが不得意な内容→「わかる」学力

概念的理解，考え・解法・理由などの説明→無答率の高さ（学習観の問題）

イ　授業力向上プロジェクトの推進

学びあいによる授業研究

人権教育を推進する上では、子どもたちにとって自分の意見や主張が受け入れられる、つまり、安心して学べる授業をつくることは重要である。また、わかる授業づくりに向けて教師が指導力を向上させることは必須の課題である。そのため、授業研究をいかに深めることができるかが重要であると考えて研修の推進に努めている。研究１年目の課題の一つとして、確かな学力を身に付けるためには、一人一人の教師の授業力アップを図る事が必要であるということを話し合った。人権教育の成立基盤としての教育・学習環境を充実させる取組の一つとして、教師の授業力向上を図ることをねらいとし、授業力向上プロジェクト(JKP) を現職教育に組み込み、年間一人２回以上の授業公開を行った。

（2） 集団づくり

ア　児童理解の工夫

教師が教育実践を振り返るための人権教育チェックポイントの活用方法を見直し、週プログラムに今週のチェックポイントを提示し、各自自己評価した。毎週１つに絞ったため、意識しながら無理なく実施することができた。

その他……○Q-Uテスト
○児童理解のための
事例研究
○いじめ
アンケート

毛野南小　人権教育チェックポイント（週案版）

場　面	チェック項目	一学期	二学期	三学期
朝の教室 健康観察の時	朝の活動の時間に一人一人の児童の様子を観察しているか			
	表情や声の様子を感じ取っているか			
休み時間	一人でポツンとしている子はいないか，観察しているか			
学習の時	授業の始まりに，何か不安な様子はないか表情を見ているか			
	机間指導の時間を確保し，言葉かけを行っているか			
	発表の様子を良く見守っているか			
給食の時	子どもたちのグループに入って会話をしているか			
清掃の時	一緒に働きながら，子どもの様子や表情を見ているか			
放課後	子どもたちの下校の様子を見たり，会話を聞いたりしているか			
その他	他の先生方と協力して，子どもの様子を見ているか			
	子どもたちの声に耳を傾け，相談に乗っているか			
	家庭での過ごし方などについて，保護者と話す機会を作っているか			

チェック項目の評価の方法
① 週予定表に提示された「今週の人権教育のチェック項目」について，振り返る。
② 4段階で自己評価する。（数字の意味は下記の通り）
4（よくできた），3（できた），2（あまりできなかった），1（できなかった）

イ　自尊感情を高める取組

本校では、自尊感情を、人権を基盤とした人間関係の形成に欠くことのできない要素と考え、重視してた。そこで、セルフエスティーム（充実感・達成感・自己有用感・自己肯定感等）を実感できる活動を積み重ねていくことで、自分のよさや能力、活動を通しての変容等に気付かせ、自分に対する自信をもたせることに努めた。

音楽発表

具体的には……　○がんばり賞、思いやり賞（※２）
○音楽発表、音読発表（学年発表）
○ミニ音楽集会（個人・グループ発表）　○各種行事

■解説■

※２　がんばり賞、思いやり賞

本校の学校教育目標「がんばりぬく力・思いやる心」を基に２つの賞を設定。年間７回、校長室で一人一人に手渡している。

〇がんばり賞・・・継続して努力していること

〇思いやり賞・・・他児童に対して思いやりのある言動が見られたこと

ウ　仲間意識の育成

あいさつ運動
「おはようございます！」

なかよし班活動（異年齢集団活動）では、子どもたち同士の助け合い、認め合いを励行し、思いやりのある子を育成することをねらいとして、様々な場面に取り入れている。異年齢集団で構成するなかよし班の活動を充実させることによって、集団への連帯感を深め、望ましい人間関係の形成を図れるようにした。

具体的には・・・

〇清掃活動（毎日）

〇なかよしサークル（月に１回）

〇全校集会活動

（なかよしハイキング、スポーツ集会）

〇あいさつ運動

（３）　関係づくり

ア　学校だより、学年だより、人権教育だより等を生かした啓発

学校・学年だよりに人権教育コーナーを設け、子どもたちのよい行いや、活動の様子などを掲載した。また、そのような行いを教師がどのように感じ取り、どう支えていこうとしているかを伝えてた。教師が「子どもたちのよいところに目を向けている」ということを伝えるよい機会になった。研究課題に迫るための様々な実践を通して、教師自身が考えたことや学んだこと、気付いたことを記録し、保護者に理解してもらえるように発信することは、自己研鑽のよい機会ともなっている。

イ　人権週間を通した保護者啓発の工夫

本校では、夏と冬の２回人権週間を実施した。年２回の人権週間のねらいや活動内容を学校だより、学年だより、人権教育だより等で紹介した。

＜夏の人権週間では＞

〇人権に関わる作文の作成

〇学年部会において人権教育の取組の説明

〇人権集会（視覚障害者・聴覚障害者との交流）

＜冬の人権週間では＞
○人権に関わる標語の掲示
○人権に関わる道徳の時間の授業公開と話合い
○学級紹介（給食時校内放送）

ウ　家庭との連携

研究課題に迫るため、家庭との連携を図りながら、児童の学習習慣や正しい生活習慣の確立に配慮した。

具体的には……○家庭学習のすすめ
○親学習サロン
○テーマをもった
学年部会・学級部会
○家庭訪問

親学習サロン
グループで話し合ったことの発表

5　教職員研修

（1）同和問題をはじめ様々な人権問題の認識を深める実践的研究

教職員の同和問題の認識の深まりとそれに基づいた実践を目指して、毎年被差別体験者との交流を実施した。今年度は、人権に関わる日常ありそうな場面を事例として示し、小グループによる話合いを行った。また教師としての同和問題や人権教育に対する認識、取組をふり返り、今後の人権教育に取り組む姿勢を再確認した。

被差別体験者との交流

（2）学校間協同推進による実践的研究

市内各小中学校に授業を公開し、実践についての意見の交流を図り、研究の成果や課題を確認した。

6　実践事例の実績、実施による効果

（1）授業づくり

・本校の人権教育に関する研究課題「豊かな表現力をもった児童の育成」のために、大学教授の指導による授業研究を継続的に行ってきた。その中で、協同的探究学習への取組を通して「わかる学力」と「できる学力」を分けて考え、「わかる学力」を高める授業展開を工夫するようになった。
・児童一人一人の実態を把握し、児童に寄り添う事で、児童が必要としている支援を的

確にすることができた。その結果、児童の意欲や理解度が深まった。
・授業力向上プロジェクトによる授業研究会を通して教師の授業力向上への意欲が高まりつつあり、各教科の習得と活用のサイクルを考えた「わかる授業づくり」のための工夫が見られた。さらに、他の教師の授業を参観する機会が増え、授業力アップにつながる教師同士の情報交換が多くなった。

（２）集団づくり

・様々な活動を通して、児童は、友だちのがんばりや思いやりの行動を見つけるとともに、素直に称賛するようになった。そして、友だち同士が互いに高め合い、学級の中における児童一人一人の所属意識も高まってきた。
・仲良し班では、清掃活動に上学年が下学年にやり方を教え、助け合う姿や、休み時間に異学年の児童が一緒に遊ぶ姿が多く見られた。また、学級の共遊についての話し合いの中で、全員が楽しめる遊びやルールを決めるなど、児童が意識するようになってきた。
・帰属意識や、規範意識が向上してきたことにより、落ち着いた学習への取組、行事への取組が見られた。そして、学習指導のねらいを達成するための基盤ができ、基礎学力がつき、学力も向上してきている。
・アンケートやＱ－Ｕテスト、教育相談の実施により、児童一人一人の悩みや思いを把握することができ、対応を考え児童に接することができた。また、教職員同士が情報交換や情報の共有化を密にすることで、一層の児童理解ができた。

（３）関係づくり

・本校の人権教育について「一人一人の児童に目を向け、大切にする教育」という前提で、具体的な取組について家庭訪問で伝えるとともに、家庭訪問で出た保護者の声を、全職員で共通理解し、その後の児童との関わりに生かすことができた。
・人権作文を通して、児童の思いや願い、不安や悩み、そして人権感覚を把握することができた。あわせて、教師がコメントを入れることで、教師自身の人権感覚の見つめ直しもできた。また、人権作文や全校一斉に道徳の授業を公開することで、本校の取組について保護者の理解を得るのに効果的であった。さらに作文や授業をもとに保護者会や家庭内で話し合う機会を設けることで、人権について児童、保護者、教師の三者で話し合う機会をもつことができた。
・学校だより、学年だより、人権教育だより等、学校から様々な方法で、子どもたちの様子を発信することで、学校における人権教育を保護者に理解してもらうのに役立った。また様々な実践（教育活動）を通して、教師自身が考えたことや学んだこと、気付いたことを記録し、保護者に理解してもらえるように発信することで、教師の児童を見る目が養われるとともに、自己研鑽のよい機会となった。

7　実践事例についての評価

（１）取組についての評価

・研究を進めるにあたって、「授業づくり」「集団づくり」「関係づくり」という三本柱による連携を深めながら、つまり土台をしっかりとやった上での授業研究が行われていた。
・人権教育の根底でもある授業を大切に、子どもたちが安心して居場所のある授業をつくることを心がけてきた。そのために教材研究だけでなく、人権教育の視点から一人一人を見て、学びの様子を十分に把握することを意識してきた。特にA児という一人の子どもを見つめること、それを全体に広げていくという感覚をこれからも大切に取り組んでいきたい。

（２）保護者や地域住民からの反応

・自尊感情を高める活動として、朝の活動の時間を活用し、学年ごとに実施している音楽発表と音読発表を昨年度より保護者へ公開した。本年度は８４％の保護者の参加があり子どもたちの発表に賞賛の言葉掛けをたくさんいただいた。そのため、子どもたちは自信をもって取り組み自己肯定感も高まってきたと感じる。
・日常の仲良し班活動を基本に、月に一度の共遊タイム、あいさつ運動、児童会主催の各種集会において異学年で活動することによって、上学年は下学年を思いやり下学年は上学年に感謝をしながら仲良く活動する姿が多く見られた。卒業式では、卒業していくなかよし班のお兄さんお姉さんを思って、思わず号泣する下学年の姿に、保護者や地域の方から感動の声が毎年寄せられている。
・冬の人権週間における道徳授業公開では、たくさんの保護者の参観があり、その後の保護者会には、約8割の保護者が参加し、本校の人権教育について話し合うことができた。

（３）課題

・今後も一人一人の子どもを見る目が深まり変わることを大切にし、子どもの把握・保護者との関係・教師同士の関わりを深めながら研究の成果を発展させたい。
・職員研修の一層の充実を図ることにより、自らの人権感覚をさらに磨き高めることができるように努めていきたい。

授業づくり　参考資料

授業力向上プロジェクト（JKP）

○ねらい　人権教育の成立基盤としての教育・学習環境を充実させる取り組みの一つとして、教師の授業力向上を図る。

1　年間に１人２回以上の授業公開を行う。

①実施教科（国語、算数、社会、理科、道徳）

②授業の準備

事前に指導案を作成し全職員に配付する。（実施日の前日まで）

＜授業づくりの工夫＞

○参観する他の教員に、授業の観点が分かるようにする。（指導案に盛り込む。）

○指導案の書き方を工夫する。（できるだけ簡素化を目指す。）

○教師の姿勢として、子どもとともに授業をつくる。協同的な学び（学びあい学習）を積極的に取り上げる。

2　授業の実践

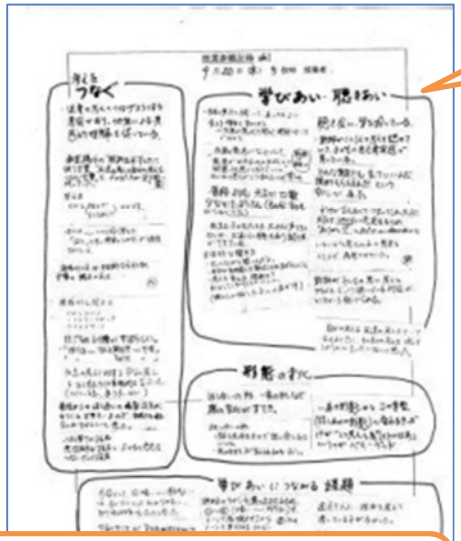
①授業を見合うための時間の確保の工夫

○ブロックごとに JKP 推進担当を決め、実施日を調整する。

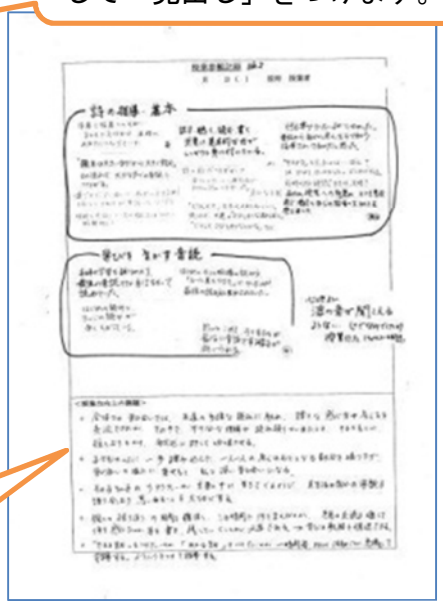
3　授業のふりかえり

①授業を参観した教員は、付箋紙に授業の改善点等を記入し、参観後授業者へ渡す。

②授業者は、「授業参観記録」に付箋紙をラベル分類法にて分け、自分の授業力向上の課題を把握する。（個人作業）



もらった付箋紙を分類しグルーピングして「見出し」をつけます。



まとめたものを確認し、次の授業に生かしたい自分の課題を書き出します。

③現職教育にてブロック全体のふりかえり

○自分の授業参観記録簿を人数分印刷し、話し合う。

○次回の JKP 週間の設定

○資料は JKP ブロック記録簿に入れ、教務→教頭→校長と回覧する。

集団づくり 参考資料

なかよし班活動

○ねらい　　学年や学級を異にする児童が協力して活動しようとする意欲を高め、集団への連帯感を深め、望ましい人間関係の形成を図る。

○なかよし班の編制

①新年度に、児童の実態をよく把握している旧担任の意見を参考に、児童の組み合わせ（きょうだい関係、支援を必要とする児童など）を考慮して編制する。全担任で児童同士の組み合わせについて話し合う時間を設ける。

②１組がＡ班とし、２組がＢ班とする。各１２班ずつ編制する。班の人数は１１人～１２人とし、全学年の児童が必ず入るように編制している。

③各班の６年生１名が班長、５年生１名が副班長を務める。

・清掃をなかよし班のメンバーで分担し行っている。
・なかよしサークルとして、月に一度、昼休みに、なかよし班で遊んでいる。
・全校集会活動（なかよしスポーツ集会、なかよしイキング集会、クリーン活動）を計画・実施している。
・あいさつ運動週間を各学期に２週間ほど設け、朝の登校時にあいさつをしている。

なかよしハイキング集会の様子です。

毎週水曜日はトリムの日。担任も一緒にあそびます。

学級における仲間づくり

○トリム（学級共遊活動）

係が中心になって遊びを考え、学級の友達と全員と遊ぶことの楽しさを味わえるようにしている。

○グルーピングの工夫

グルーピングは、隣同士、グループ、全体、教師が決めたメンバー等、活動の内容によって意図的に組ませ、活動の意欲の持続、また、学びあい学習に結びつくように働きかけている。

○スマイルクラスの児童との交流

交流学級でのグループや座席、係や当番、行事での活動の仕方など担任と話し合い、児童が仲間と楽しく活動したり活躍できるようにしたり、新たな人間関係をつくったりできるようにしている。

関係づくり

参考資料

人権教育コーナー

5月 スキップ

本格的な始動

『やる気』のある4年生！！

学習予定

5月の生活目標

人権教育コーナー

家庭だより

今、業間運動では大縄跳びをしています。苦手な子が飛ぶときに、みんなで声を出してあげたり、ひっかかってしまっても攻めたりすることなく、「ドンマイ。」「次頑張ろう。」と声をかけてあげたりする姿を見ていると嬉しくなります。縄跳びは得意な子もいれば苦手な子もいます。誰かがひっかかってしまうと、縄は止まってしまいます。この縄跳びの考えは、学年やクラスの集団活動と同じだと思います。それぞれ得意なこと苦手なことがあっても、互いに認め合ってみんなで協力していく。誰かが生活の中での「縄」にひっかかってしまっても励まし合っていく。そんな思いやる心を、縄跳びをきっかけに、さらに強く持てるようにしていきたいと思いました。

人権集会（聴覚障害者との交流）

聴覚障害者と手話ボランティアを招いての授業

【児童の感想】

☆わたしは、手話が大好きです。それは手話を使うと耳の不自由な人と話ができることをボランティアの方から教えてもらったからです。

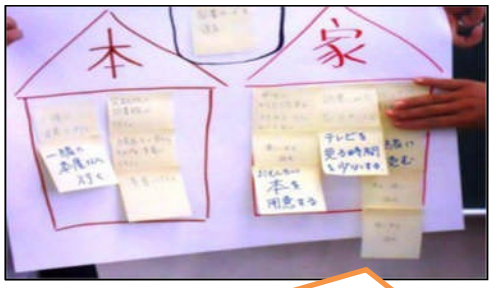
☆今日は、うれしいことが２つありました。１つは手話で「わたしは〇〇さんが好きです。」とやったら、「ありがとうございます。」と笑顔で返してくれたことです。もう１つは自分の名前を指文字で表すことができたことです。もっと手話を覚えて、いろいろ話したいです。

親学習サロン

親学習プログラムを活用した保護者対象の学習会のこと。

親学習プログラムとは・・・

子どもの理解や子どもの接し方、親子のコミュニケーションなど、子育てに必要な知識やスキルについて、参加者同士が身近なエピソードやワークを通して話し合い、交流しながら主体的に学ぶ、参加型の学習プログラムです。話合いを進めて行く中で、自分自身の問題に気づいたり、親としてのあり方や役割について考えたり、整理するためのきっかけとするものです。



意見を書いた付箋紙を相談しながらグループ分けし整理します。

人権教育だより

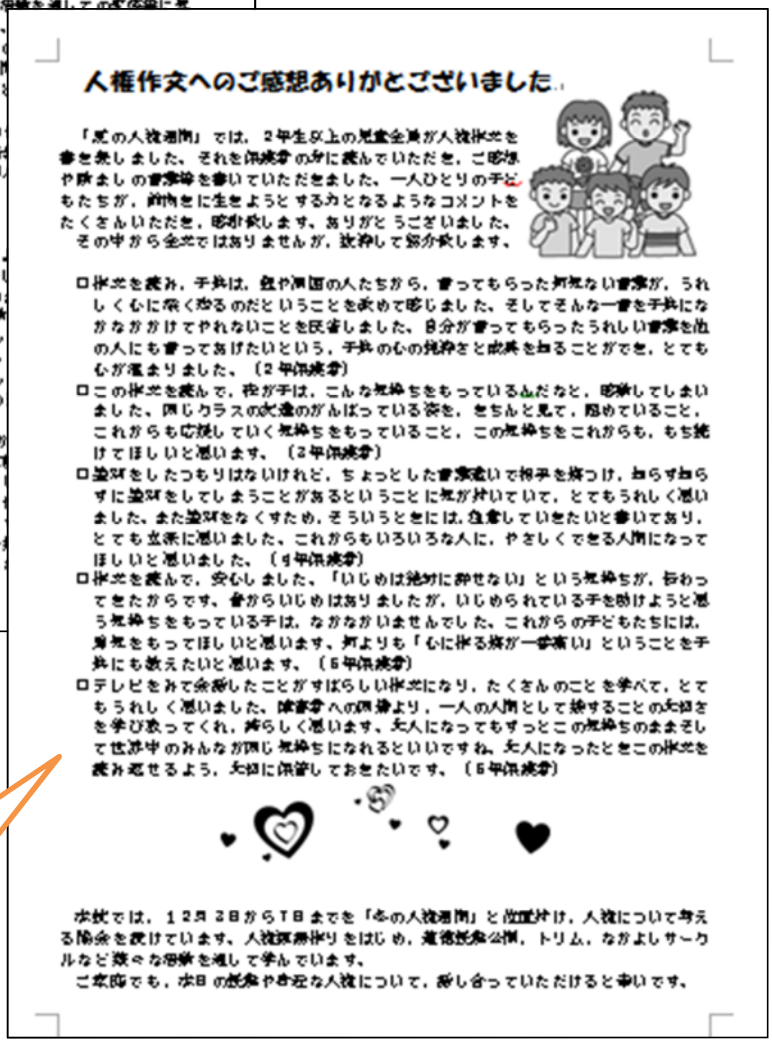
若野南小学校
人権教育だより
平成24年12月6日

ぴゅあ

自尊感情を高める取り組み

仲間意識の醸成

人権教育だより「ぴゅあ」は、人権週間にあわせて、年に２回発行しました。

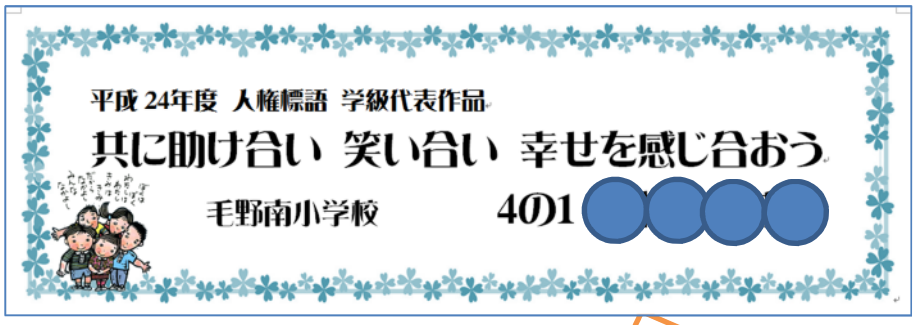

人権作文へのご感想ありがとございました

子どもの作品を読んだ保護者の感想をのせ学校と家庭を結ぶ通信を目指しました。

○作文を読み、子供は、親や周囲の人たちから、言ってもらった何気ない言葉が、うれしく心に深く残るのだということを改めて感じました。そしてそんな一言を子供になかなかかけてやれないことを反省しました。自分が言ってもらったうれしい言葉を他の人にも言ってあげたいという、子供の心の純粋さと成長を知ることができ、とても心が温まりました。（２年保護者）

人権標語

人権週間に全校児童全員が人権標語づくりに挑戦し、全員の作品はクラスに掲示しました。さらに、クラス代表作品を１点選び、学校内・各家庭・地域の皆様にもお送りし、人権の輪をさらに広げる活動に取り組みました。



印刷して、保護者・地域のみなさんに配付しました。

階段や掲示板でいつも目に付くように工夫しました。
地域の公民館にも掲示しています。

家庭学習のすすめ

子どもを支えるサポーター4つのポイントとしてまとめ作成配付しました。

■あとがき■

２０１１年３月１１日東日本大震災の後、本校の人権教育の研究が始まりました。絆という言葉が静かに語られ、誰もが命と向き合い、教育とは、学校とはを問い続けながらの船出となりました。社会を生きぬく力こそが未来を創ること。高い人権意識に基づいた真に幸せな生活を誰もが送ること。そのための一歩一歩の確かな実践こそが本物の力になることを信じ、２年間の研究に「チーム毛野南小」で取り組んできました。

今、教室には聴きあう空気が流れています。気持ちのよい学びあいが始まっています。みんなで力を合わせて活動する時間があります。言葉に思いをのせた心地よい歌声も響いてきます。毛野南小の子どもたち全員が笑顔であいさつを交わす毎日があります。

子どもの成長を保護者とともに喜び合えること、これが毛野南小の大事にしてきたことです。本校教職員には時間をかけて丁寧に紡いできた物語があります。それは子ども一人一人と、学級・学年、学校の子どもたちみんなと、保護者と、そして自分自身とを見つめ見つめ直してきた物語です。これからも私たちの実践は続きます。質の高い学びを子どもたちに保障する教育活動を対話をしながら創り上げていく毛野南小でありたいと思います。

最後に、この研究に終始温かなご助言いただきました多くの皆様にお礼申し上げます。

【Special Thanks】

栃木県教育委員会学校教育課　小中学校教育担当
指導主事　小栗　克樹　先生
入野　伸行　先生
安足教育事務所　学校支援課
指導主事　中野　公二　先生
足利市教育委員会学校教育課　指導担当
指導主事　関根　景子　先生
指導主事　柏瀬　和彦　先生
指導主事　髙木　秀和　先生
教科指導員　島田眞津美　先生
東京大学大学院教育研究科　教授　藤村　宣之　先生

【staff】

＜平成２４年度＞

福地百合子	村山　哲也	柏瀬　満	岡田　千里	関口　晴美	尾花千代子
髙野　有希	丸山　雅子	柘野真祐美	鈴木　美帆	上田　晴子	木村　歩
小松原茂雄	内山　和恵	湯澤　亨	小暮　忠博	栗原　貴広	新井　悟
大山美登里	佐山みち子	田名網めぐみ	金澤ジュン子	山﨑眞須美	山田　伸二
新分　幸夫	川田美智代	齋藤　圭子	鹿児島淳子	長谷川ﾏﾘｰｻ	メリッサミルズ

＜平成２３年度＞

大野　宣夫	嶋﨑　真一	木村真利子	石井　令子	中村由美子	若山　貴子